

イランにおける最近の考古学的調査の進展

足立 拓朗

Recent Developments in Archaeological Research in Iran

Takuro ADACHI

キーワード：シアルク、ハサンル、ルリスターン、エラム、イラン

Key-words: Sialk, Hasanlu, Luristan, Elam, Iran

はじめに

イランの考古学の最新情報¹⁾については、2005年の *Archäologische Mitteilungen aus Iran und Turan* 誌に掲載された報告で M. アザルヌーシュ (Azarboush) と B. ヘルヴィング (Helwing) が簡潔にまとめており (2005)、本稿もその成果を参考にしている。しかしながら、前記報告は鉄器時代までしか扱っていないので、それ以降の時代の成果を追加し、著者自身が特に重要と考えるトピックについても言及する。また2005年以降の調査情報も加えた。イランの考古学に関する様々なニュースは、古代イラン研究サークル (The Circle of Ancient Iranian Studies) が運営するウェブ・サイト内のデイリー・ニュースのページで紹介されている (<http://www.cais-soas.com/NewsUpdate.htm>)。このページはほぼ毎日更新されており、イランの考古学に関する動向を知るのに非常に有効である。

1990年代からイランの発掘調査は活性化し、野外調査の総数は2005年3月～2006年3月において、250件以上にのぼり、2000年以来、12件の外国隊とイラン隊の共同調査が行われている (Azarnoush and Helwing 2005: 189)。1985年以来、イランの文化財を監督してきたイラン文化遺産庁は、2004年にイラン文化遺産観光庁 (ICHTO: Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization)、現在はイラン文化遺産観光手工芸庁 (ICHTHO: Iranian Cultural Heritage, Tourism, and Handicraft Organization) に改称、組織を改編している。そして、ICHTHOの下部機関であるイラン考古学研究センター (ICAR: Iranian Center for Archaeological Research) が考古学調査を実施している。

前期旧石器時代から終末期旧石器時代

旧石器時代の調査・研究は、1990年代初めから F. ビグラーリ (Biglari) により精力的に調査された。特に彼の調査はケルマンシャー州で行われている (Biglari and Abdi

1999)。注目すべきことは、踏査によって洞窟遺跡ではなく開地遺跡が多く発見されていることである。2001年には、イラン国立博物館の旧石器研究センターが設立され、旧石器研究の拠点となっている。

イランの旧石器時代研究は、P. スミス (Smith) の著書 (1986) が参考にされ、現在でもその重要性は失われていない。しかしながら、いくつかの修正は必要になってきている。イランにおける前期旧石器時代には二つの異なった技術伝統、コア・チョッパー・インダストリーとアッシューリアン・インダストリーで特徴づけられており、それらはザグロス山脈でのみ発見されていた。ギーラーン州キャルーラズ峡谷のギャンジ・パル (Ganj-par) 遺跡で、新しくアッシューリアン・インダストリーが発見され (Biglari et al. 2004)、注目を集めている。現在のこの遺跡の資料は、国立考古学博物館で展示されている。

中期旧石器時代の新しい調査成果がタジキスタンとトルコで成されており、これまでのザグロス山脈の成果と比較検討することが可能になった。その結果、ザグロス山脈の中期旧石器時代遺跡の年代を250,000年前とする見解が提示されており、以前の意見 (約80,000～70,000年前) の再考が求められている (Azarnoush and Helwing 2005: 191-192)。

後期旧石器時代の注目すべき発見は、ケルマンシャー州で発見されたマラバード (Malaverd) 遺跡である。オーリナシアンに特徴的な石器群が出土しており、AMSによる放射性炭素年代で30,000年前という年代が提示されている (Azarnoush and Helwing 2005: 193)。また、エスファハン州では開地遺跡であるセフィーダブ (Sefidab) 遺跡が発見され、ザグロス山脈の外側でオーリナシアン系の石器群がはじめて検出された (Biglari 2003)。

終末期旧石器時代のザルジアン・インダストリーの開地遺跡が、イラン高原中央部のいくつかの場所で発見されている (Azarnoush and Helwing 2005: 193)。また、終末期

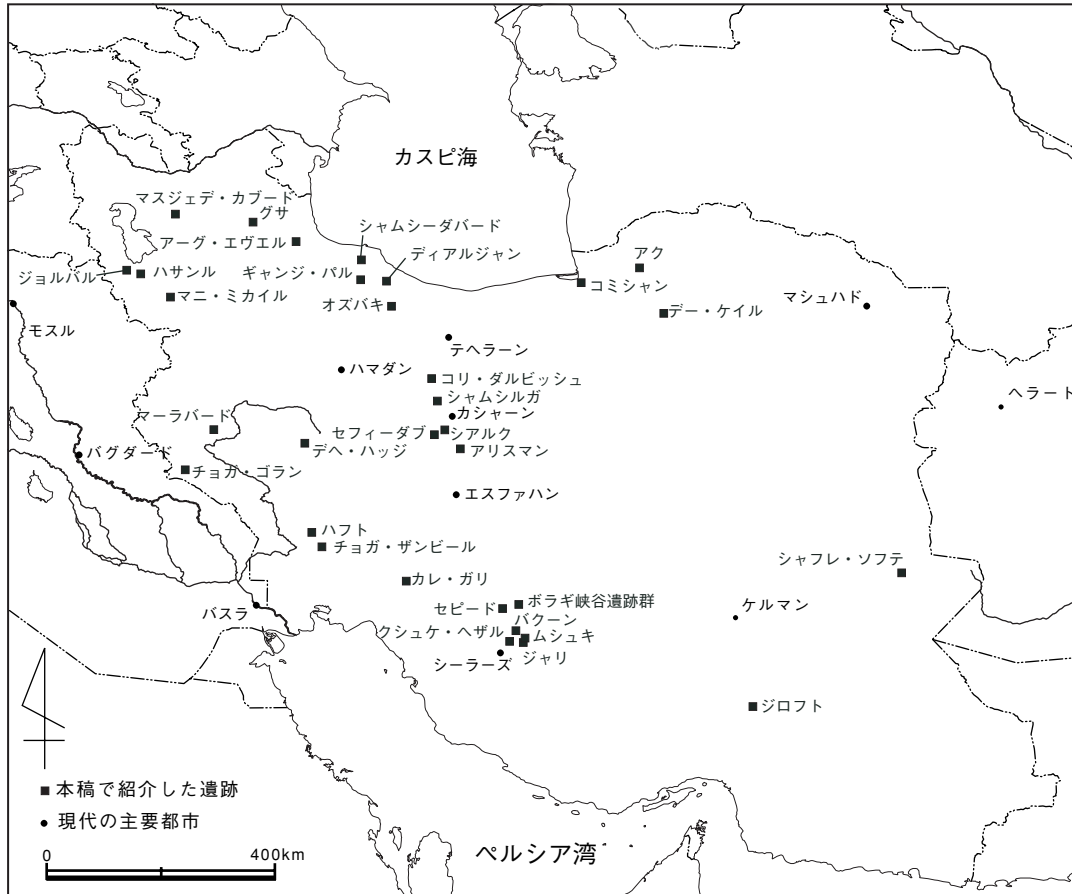


図1 イランで最近調査された主要遺跡 (遺跡名から「タッペ」は省略)

旧石器時代から新石器時代へかけての遺跡が、ICHTHOのゴルガン支局によって調査され、マーザンダラーン州でコミシャン (Komisan) 洞窟が発見された (Azarnoush and Helwing 2005: 193)。そのアセンブリッジは、良く知られているホトゥやキャマルバンド洞窟の資料に良く似ている (Coon 1951, 1952)。

新石器時代

北西イランにおいては、ハッジ・フィルツ期に属する遺跡としてグサ・タッペ (Gusa Tappe) がアルデビール州で発見された。この遺跡では、銅器時代から青銅器時代の住居層、鉄器時代の墓地が検出された。ダルマ期の遺跡としては、西アゼルバイジャン州のタッペ・ジョルバル (Tappe Jolbar) 遺跡がある。ハスキングトレイ、骨製の銚、ウルミエ湖から採取された貝などが出土している。同じくダルマ期の遺跡として、コルデスタン州のマニ・ミカイル洞窟がある (Azarnoush and Helwing 2005: 193)。

南西イランではイーラム州のメフラン平野で踏査が行なわれ、先土器新石器時代アリ・コシュ期併行期のチョガ・ゴラン1 (Coga Golan 1) 遺跡が調査された。不規則な剥片だけでなく、小型の石刃や弾丸形石核からなる石器群

を有する。資料のかなりの部分は黒曜石製である。ビンガムトン (Binghamton) 大学の R. ベーンベック (Bernbeck) と S. ポロック (Pollock) が旅行中に発見したロレスタン州のデヘ・ハッジ (Deh Haji) 遺跡はひどく損傷を受けた後期新石器遺跡の遺丘であり、スサ入り土器や褐色彩文土器といった資料が出土した (Azarnoush and Helwing 2005: 194)。

南イランのファルス州マルブ・ダシュト (Marv Dasht) 盆地の先史時代の編年は、最初に L. ヴァンデン・ベルヘ (Vanden Berghe) が唱えた。ジャリ遺跡が古く、ムシュキ遺跡がその後、バクーン遺跡の資料がさらに後に続くという見解であった。しかしながら、東京大学はファルス州で調査し、ムシュキ遺跡が最も古く、ジャリ遺跡が2番目、そしてバクーン B 遺跡が三番目となる編年を提示した。2004年にペルセポリス研究財団の要請で、シカゴ大学オリエント研究所の A. アリザデ (Alizadeh) がタッペ・ジャリ (Tappe Jari)、タッペ・ムシュキ (Tappe Mushki)、タレ・バクーン (Tal-e Bakun) A, B 遺跡を再調査し (Alizadeh 2004)、最も古いものとしてバクーン B1、パフ彩文土器のジャリ B 遺跡資料を2番目の時期に定義し、3番目をムシュキ彩文土器、バクーン B2を4番目に定義

する編年案を提示した。

マルブ・ダシュト編年について、上記のアリザデの見解がアザルヌーシュとヘルヴィングの報告に記されている (Azarnoush and Helwing 2005: 196) が、あくまでもこの編年案は、2004年段階のアリザデの編年案を紹介したものである。最近、アリザデはバクーン遺跡の本報告書を出版しており (Alizadeh 2006)、それによると東京大学の編年に沿った見解が述べられている。また、マルブ・ダシュト盆地で新たに調査されたクシュケ・ヘザル (Kushk-e Hezar) 遺跡の報告でもマルブ・ダシュト編年が再考されており、東京大学の編年と若干異なる年代観を提示している (Alden et al. 2004) が、基本的な前後関係は一致している。アリザデの再調査とクシュケ・ヘザルの調査によって、ムシュキ期以前に新たな時期が加わる可能性がでてきた。アリザデはこの時期の土器を「スウーシュ・ウエア (Swoosh Ware)」と呼んでいる (Alizadeh 2006: 7)。

テヘラン州のタッペ・オズバキ (Tappe Ozbaki) 遺跡では、9つの小型遺丘と1つの大型遺丘からなる遺跡群が発見され、新石器時代からメディア時代の居住層が明らかになった。新石器時代は小型遺丘の一つヤン・タッペ (Yan Tappe) で発見され、シアルク I, II 期と並行するイラン高原前期 A 期 (Early Plateau A)、B 期 (前期) に位置づけられている。次の時期は、イラン高原前期 B 期 (後期) (シアルク II 期後期?) であり、もう一つの小型遺丘ジャイラン・タッペ (Jayran Tappe) でも検出されている。また、マラル・タッペ (Maral Tappe) とドサン・タッペ (Dosan Tappe) 遺跡では、「プラム・ウエア (Plum Ware)」と呼ばれる土器が出土しており、イラン高原前期 B 期末と考えられている (Azarnoush and Helwing 2005: 197)。

セムナン州では、タッペ・デー・ケイル遺跡 (Tappe Deh Keir) が新たに発見された。この遺跡は日本隊によって、1960-70年代に調査されたサンギ・チャハマック (Sang-e Cakmaq) 遺跡から5 km も離れていないところにある。サンギ・チャハマック遺跡で確認された「無土器」期を含み、チャシメ・アリ期に類似した資料も出土している。ゴレスタン州では、アク・タッペ (Aq Tappe) が新たに調査された。シアルク 0 期 (ザゲー期) に類似する資料が出土している (Azarnoush and Helwing 2005: 199)。

銅石器時代から前期青銅器時代

ICAR と D.ポッツ (Potts) の共同チームは、ファルス州西部のママサニ (Mamasani) 平野で踏査を行ない、いくつもの遺跡を確認した。トレ・ヌーラバード (Tol-e Nurabad) 遺跡では、発掘調査が行われ、ムシュキ系土器、バクーン系土器が検出された。その後の時期として、ラプ

ーイ (Lapui)、バネシュ (Banesh)、カフタリ (Kaftari)、中エラム期、アケメネス朝期の土層が確認された。また、トレ・セピード (Tol-e Sepid) 遺跡では、銅石器時代から青銅器時代までの層位が確認された。最古の資料はラプーイ期に属しており、前4千年期前半に位置づけられる。ラプーイ期からバネシュ期への移行期の層位が検出されており、紫色の彩文土器やベベルド・リム・ボウルが出土している (Azarnoush and Helwing 2005: 204)。

ファルス州のシーバンド・ダム (Tangh-e Bolagi) の緊急調査によりボラギ峡谷 (Tangh-e Bolagi) では幾つかの遺跡が調査された。TB91 遺跡では、中期バクーン期あるいはギャップ期に属する3基の土器窯が出土した。住居は全く検出されなかった。TB73 遺跡は、後期バクーン期の土器製作遺跡であり、5つの土器窯が検出された。同様な土器窯遺構はタレ・バクーン (Tal-e Bakun) A 遺跡にも知られている (Azarnoush and Helwing 2005: 205)。

ゴム州のタッペ・コリ・ダルビッシュ (Tappe Qoli Darvis) 遺跡では、シアルク III 期から青銅器時代の層が確認されている。ベベルド・リム・ボウルも検出され、またクラ・アラクセス (Kura Araxes) 期に属すると考えられる資料も出土しているようだ。この遺跡はクラ・アラクセス系遺跡の東限と言えよう (Azarnoush and Helwing 2005: 207)。

ギーラーン州のデーラマン盆地で1960年代に踏査されたディアルジャン (Diarjan) 遺跡の資料調査が、H.ファヒミ (Fahimi) によって行なわれ、資料にクラ・アラクセス期の土器が含まれることが提示されている (Fahimi 2005)。クラ・アラクセス期の物質文化がシリアからトルコ、コーカサス地方、イランまでの広い分布を示すことが次第にあきらかになりつつある (Rothman 2005: Fig. 2)。コリ・ダルビッシュ遺跡とディアルジャン遺跡でも発見されたことにより、イラン中央部までがその範囲に収まったと言えよう。

エスファハン州のタッペ・シアルク (Tappe Sialk) 遺跡では、遺跡とその周辺を保護し、再調査するために ICAR によって「Sialk Reconsideration Project (SRP)」が実施された。この計画の目的の一つは、シアルク南遺丘のギルシュマンの1930年代の成果を再考することであった。シアルク III-IV の移行期の詳細な資料を得るために大規模な発掘が実施され、銅冶金に関連する炉を確認し、大量の銅滓を検出した。タッペ・シアルク遺跡から60km離れたアリスマン (Arisman) 遺跡はシアルク III, IV 期に相当する。遺跡の範囲は1キロ四方以上に広がっており、二つの主要な居住域が確認されている。古いほうが後期シアルク III 期 (前4千年紀)、新しいほうはシアルク IV 期 (前3000年頃) に属する。古いほうの居住区には専門化され

較正年代	メソポタミア	エラム / パルシア	ルリスターン西部	フゼスタン	ファルス	中央イラン	北西イラン	南西イラン
7000BC	プロト・ハッサーナ				スウーシュ・ウエア クシュケ・ヘザル ムシュキ			
6000BC	ハッサーナ		ゲーラン デヘ・ハッジ	アルカイック・スシアナ		ザゲー	ハッジ・フィルツ グサ・タッベ	
	ウバイド1			スシアナ a	ジャリ	シアルク I オズバキ	ビスデリ ダルマ マニ・ミカイル	
5000BC	ウバイド2			スシアナ b				
	ウバイド3			スシアナ c	バクーン	シアルク III1-3		ヤヒヤ VII
4000BC	ウバイド4		バルチナ ハカラン	スシアナ d		シアルク III1-3		ヤヒヤ VI
	ウルク前期			スーサ I	ラブーイ トレ・セビード	シアルク III4-5		ヤヒヤ VC
3000BC	ウルク中期			スーサ II		シアルク III6		ヤヒヤ VB-A
	ウルク後期					シアルク III7		
2000BC	ジェムデト・ナスル	アワン朝	ミル・カミル カレ・ニサル バニ・サルマー	スーサ III	バネシュ	アリスマン シアルク IV コリ・ ダルヴィツシュ アリスマン	クラ・アラスクス ディアルジャン	シャフレ・ソフテ I ジロフト
	初期王朝 I 初期王朝 II 初期王朝 III アッカド ウル第3王朝 イシン・ラルサ 古バビロニア	ブズル・インシュシナク王 シマシキ朝 スッカルマフ朝		スーサ IV				シャフレ・ソフテ II シャフレ・ソフテ III シャフレ・ソフテ IV
1000BC	カッシート	キドゥス朝 イギハルキ朝 シュトゥルク朝 フテルツシュ・ インシュシナク王 新エラム I期	ドウルイエ クタリ・ゲグル		カフタリ		ハサンル V アークエヴェル	
	イシン第2			ハフト・テベ				
0	新アッシリア 新バビロニア	新エラム II期 新エラム II期	テベ・カルワリ	カレ・ガリ・タッベ		シアルク V シアルク VI	ハサンル IV マスジェデ・カブード	
	アケメネス朝	メデア アケメネス朝	チャマジ・ムマー ジュービ・ ガウハル タツトルバーン		TB34,76,77,85	コリ・ ダルヴィツシュ オズバキ	ハサンル III	テベ・ヤヒヤ
	アレクサンドロス	アレクサンドロス						
	セレウコス朝	セレウコス朝						
	バルティア	バルティア						

図1 前7～前1千年紀のイラン考古学編年と最近調査された遺跡（本稿で紹介した遺跡は太文字）

た陶工区があり、五つの土器窯が検出された。土器窯を覆っていた瓦礫層からは焼成失敗の土器片だけでなく大量の銅と銀の精錬スラグが検出された。シアルクIV期の二つの巨大なスラグ塊が調査された結果、溶鉱炉の残骸であるこ

とが明らかになった。アリスマン遺跡はウルク期中期併行期に南西イランに銅を供給していたと推定され、原エラム期の交易ネットワークの一部であったと考えられている (Azarnoush and Helwing 2005: 208-9)。

ケルマーン州のハリールード (Halilrud) 峡谷に位置するジロフト (Jiroft) 遺跡群は、2003年8月にテヘランで行われた「イランと西アジアの関係における最初の国際会議 (FICIWA: First International Conference on Relations between Iran and Western Asia)」で発表された。ジロフト遺跡群では1990年代後半から盗掘が行われ、多くの遺物が発見されていたようだ。出土していた石製容器は「トランスエラム」あるいは「インターカルチュラル・スタイル」といった伝統的な用語で分類され、古美術マーケットに現れていた。ICARはこれらの盗掘された墓から出土した数百の石製容器を回収し、遺跡保護のため、緊急調査を実施した。遺跡群の中でコナル・サンダル (Konar Sandal) A、B遺跡が発掘された。いくつかの精巧な印影が発見され、ハリールード様式と名づけられた。土器は前3千年紀の南東イランやパキスタンで知られている様式である。石器アセンブリッジはシャフレ・ソフテ (Sahr-e Sukhte) 遺跡の資料とよく似ており、特徴的な葉状の尖頭器を含んでいる。日干しレンガで造られた大型基壇が遺丘頂部に構築されていた。この基壇の機能はまだよく分かっていない。いくつかのクロライト製の容器に描かれたステップ状の建築物がこの基壇を表している可能性がある (Azarnoush and Helwing 2005: 210-1)。

シスタン州のシャフレ・ソフテ遺跡の発掘は、遺跡の南西の墓地、工房区、「モニュメンタル・エリア」、居住区域の4区で行なわれた。「モニュメンタル・エリア」は、前2800～前2500年頃の大規模な建築複合体であることがわかった。工房区は遺跡の北端に位置しており、広範囲が焼失していた。居住区域では、密集した建物が街路に隣接して検出された (Azarnoush and Helwing 2005: 212)。

中期・後期青銅器時代

フゼスタン州のハフト・テペ (Haft Tappe) 遺跡では、地磁気探査調査が行なわれ、中エラム期の墓地や建物群の広大ななどの遺構を発見した。その成果により、以前から確認されていた二つの基壇遺構がより大型の建築遺構の一部を形成していることがわかった。同じくフゼスタン州のチョガ・ザンビル (Coga Zanbil) 遺跡はユネスコの世界遺産遺跡であり、保存活動が数年にわたって続けられている。ここでも地磁気探査調査が行なわれ、遺跡中央部に密集した居住区域があること、また都市遺跡の周辺にも集落遺跡が存在することが明らかになった (Azarnoush and Helwing 2005: 215)。

チャハール・マハール・バフティアリー州のカレ・ガリ・タッペ (Qal'e Geli Tappe) 遺跡では、中期銅石器時代からイスラム期までの層位が確認され、中エラム期末のフテルシュ・インシュシナク (Hutelush Insusinak) 王

(前1120年頃)の銘文を持つレンガが検出されている。これまで、この遺跡周辺は中エラム期末にはエラムの覇権が及んでいないと考えられていた (Azarnoush and Helwing 2005: 215)。

鉄器時代

東アゼルバイジャン州の州都タブリーズで行なわれたショッピング・モール建設により、鉄器時代の墓群と集落遺跡が発見され、マスジェデ・カブド (Masjed-e Kabud) 遺跡と名付けられた。調査終了後、墓地遺跡の一部は保存され、野外博物館として利用される予定である。これまでに100基以上の墓が発見されている。板石で蓋をされた大型の単純な土廣墓、礫石か日干しレンガ壁で造られた大型墓、馬蹄状の囲いを持つ墓の3タイプが検出されている。遺体は屈葬で東西軸に置かれ、殆ど単葬で、様々な土器や装身具、武器を共伴する。土器は主に暗色のグレイ・ウエアで、いくつかは刻文装飾を持つ。赤色彩文あるいは刻文装飾を持つパフ・ウエアもある。ハサンル (Hasanlu) IV期あるいはV期と考えられる (Azarnoush and Helwing 2005: 218-9)。

テヘラン州のタッペ・オズバキ (Tappe Ozbaki) 遺跡では、鉄器時代Ⅲ期に属する大型の城塞遺跡が見つかった。周囲は厚さ3mの城壁で囲まれ、内部から三列の細長い部屋からなる建築物が検出された。それらは、おそらく倉庫であろうと考えられている。周壁や細長い部屋はタッペ・ヌッシ・ジャン (Tappe Nush-i Jan) 遺跡の遺構群に類似する (Azarnoush and Helwing 2005: 222)。

ゴム州のタッペ・コリ・ダルヴィッシュ (Tappe Qoli Darvis) 遺跡は鉄器時代の大型遺丘であり、イラン高原の中央部における重要な鉄器時代遺跡の一つである。遺跡はゴム市の南郊外に位置し、有名なジャムキャラーン (Jamkaran)・モスクの東5kmである。道路や建物建設により遺跡の一部が破壊され、緊急発掘が実施された。鉄器時代Ⅱ期に属する大型の基壇遺構が確認された (Azarnoush and Helwing 2005: 223)。

ゴム州のシャムシルガ (Samsirgah) 遺跡は、丘陵上の集落遺跡である。丘陵上部は自然の巨大な窪地になっており、天然の要害となっている。ゴリ・ダルビッシュ遺跡とシアルク遺跡の中間に位置する遺跡である。鉄器時代Ⅱ期に属すると考えられている (Azarnoush and Helwing 2005: 225)。

タッペ・シアルク (Tappe Sialk) 遺跡では、南丘の大基壇 (grande construction) の遺跡整備が実施された。この整備中にR. ギルシュマン (Ghirshman) 調査時の廃土が取り除かれ、その作業中に多くの印影付きレンガが検出された。シアルクⅥ期の彩文土器がこの整備中に出土した

ことから、この大基壇の年代は鉄器時代Ⅲ期と考えられている (Azarnoush and Helwing 2005: 226)。

ギーラーン州タレシュ地域では多くの鉄器時代墓地が発掘されている。特に H.ドゥ・モルガン (de Morgan) によってすでに報告されていたアークエヴエル (Aq Evlar) やトゥール (Tur) 遺跡が再調査され、ケルン墓やドルメン墓が検出されている。特に径 16 m に達する大型のケルン墓が未盗掘のまま残されており、少なくとも 7 遺体、灰色あるいは赤色土器、青銅・鉄のバイメタル製品、金製ビーカーなど鉄器時代Ⅱ期に属する遺物が検出された。重要な資料は、銘文付きの青銅製腕輪で、表土層から他の多くの遺物と相伴して発見された。銘文から腕輪は、ウラルトゥの王アルギシュティ 1 世 (前 785 ~ 前 753 年頃) からの贈り物とみなされている (Azarnoush and Helwing 2005: 228-30; Khalatbari 2004a, 2004b)。

ギーラーン州のセフィードルード川西岸に位置するジャムシーダバード (Jamsidabad) 遺跡からは 7 基の鉄器時代墓が発見された。東京大学によって行なわれたデーラマン盆地やハリメジャーンでの調査成果との比較により、鉄器時代Ⅰ期に属することが分かっている (Azarnoush and Hewving 2005: 230)。

ルリスターン地方 (イーラーム州西部) で 1965 ~ 1979 年に実施されたベルギー隊の発掘調査は、概報が学術雑誌などに掲載されていたが、本報告は出版されていなかった。しかし、1990 年代後半から大部の報告書が次々と公刊されるようになった (Haerincx and Overlaet 1996, 1998, 1999, 2002, 2003)。この成果の要約は岡山市立オリエンタ美術館の特別展「古代イラン秘宝展」の展示図録に掲載されている (ハーリンク、ウヴェラート 2002)。ベルギー隊が調査したイーラーム州西部のプシュティ・クーフ地域の遺跡は銅石器時代から鉄器時代に整然と編年されている。

銅石器時代としてパルチナ (Parchinah) 遺跡とハカラン (Hakalan) 遺跡が挙げられる。このプシュティ・クーフ地域ではウルク期の遺跡は現段階で発見されていない。青銅器時代前期として、ミル・カミル (Mir Khamir) 遺跡とカレ・ニサル (Kalleh Nisar) 遺跡がある。両者はジェムテド・ナスル期から初期王朝Ⅰ期に併行すると考えられる。バニ・サルマー (Bani Surmah) 遺跡も青銅器時代前期に位置づけられ、初期王朝Ⅰ期からⅡ期に併行する。この遺跡はプシュティ・クーフ地域で発見された最大の遺跡であり、長さ 16 m、幅 3.1 m に達する大型の石棺墓が築かれている。前 3 千年紀末になると大規模な墓地遺跡はなくなり、続く青銅器時代中期・後期の遺跡はプシュティ・クーフ地域では殆ど発見されていない。

鉄器時代に入ると遺跡数が増加する。鉄器時代ⅠA 期 (前 1300-前 1150 年頃) にはドゥルイエ (Duruyeh) 遺跡、

クタリ・グルグル (Kutali Gulgul) 遺跡があり、カッシート朝との関連が窺える遺物が出土している。装身具類として鉄器が確認されている。鉄器時代ⅠB-ⅠA 期 (前 1150-前 900 年頃) は遺跡が検出されていない時期である。鉄器時代ⅠB 期 (前 900-前 800/750 年頃) にはテペ・カルワリ (Tepe Kalwali) 遺跡やプシュティ・カブド (Pushti Kabud) 遺跡などが発見されている。鉄製剣などは出土するが、鎌は依然青銅器製である。鉄器時代Ⅲ期 (前 800-前 650 年頃) に遺跡数は大幅に増加する。チャマジ・ムマー (Chamazi Mumah) 遺跡やジュービ・ガウハル (Djubi Gauhar) 遺跡、タットルバーン (Tattulban) 遺跡などがあり、ルリスターン地域を代表する遺物である青銅製の祭祀具や突起付き青銅斧などが出土しており、それらの編年案も提示されている。また、ルリスターン地域の代表的な土器である「カイト文様」土器 (ババ・ジャーンⅢ層彩文土器) がプシュティ・クーフ地域では出土しないことも明らかとなり、このような土器はルリスターン地域東部に分布の中心が存在することが証明された。

ケルマン州のテペ・ヤヒヤ (Tepe Yahya) 遺跡は 1967 ~ 1975 年にアメリカ隊によって発掘された。最近、鉄器時代、アケメネス期、ポスト・アケメネス期の層位の報告書が公刊された (Lamberg-Karlovsky 2004)。注目されるのは北イランの鉄器時代Ⅱ期の特徴を示す嘴形注口土器が出土していることである。このような嘴形注口土器がオマーン半島でも出土しており、ヤヒヤ遺跡の資料は北イランと湾岸地方 (オマーン半島) を繋ぐ出土例となる。

アケメネス朝期

この時期の遺跡はファルス州のシーバンド・ダム建設に伴う緊急発掘により発見されている。TB34 (Fazeli 2007: 16)、TB85 (Atai and Boucharlat 2006)、TB76、TB77 (Chaverdi and Callieri 2006) がアケメネス朝期の遺跡として報告されている。特に TB34 では柱座が出土しており、宮殿跡の可能性が高い。シーバンド・ダムによって水没するボラギ峡谷 (Tangh-e Bolaghi) はアケメネス朝の最初期に建造された宮殿であるパサルガダエ遺跡の近辺にある。アケメネス朝ペルシアの起源を研究する上でこのボラギ峡谷の発掘調査の成果は非常に重要なものとなる。詳細な成果報告が期待される。

イスラーム期

ハサンル遺跡は古代北西イランの編年の指標となっている遺跡であるが、本報告が出版されていなかった。最近、最上層のイル・ハーン朝の層位が報告された (Danti 2004)。ハサンル遺跡はイル・ハーン朝の首都タブリーズに近く、イル・ハーン朝の中心地域の遺跡と言えるが、そ

の遺構は比較的小規模でキャラバン・サライのような機能を果たしていたと考えられる。長期間居住されていなかったハサンル遺跡にイル・ハーン朝期に何らかの施設が突然営まれていたことについて、報告者は牧畜に密接に関係があると考えており、この地域の移牧民の冬営地としても利用されたと推定している。

この移牧という生活形態を軸にイランの考古学データを読みとこうという動きが様々な時代で見られる。アリザデはバクーン期の遺跡分布が現在の遊牧民カシュガイ族の分布と重なることから、バクーン期の生業を移牧民の立場から復元しようと試みている (Alizadeh 2006)。また、近年開催されたメディア、アッシリア、アケメネス朝ペルシア関連のシンポジウムでは、G.B.ランフランチ (Lanfranchi)、M. ローフ (Roaf)、R.ロリンガー (Rollinger) らによって、ザグロス山脈の移牧活動の解明が前1千年紀の理解に必要であると指摘されている (Lanfranchi et al. 2003a: 400)。今後のイラン考古学研究では、この「移牧」というキーワードをいかに理解して使っていくかが肝要であろう²⁾。

註

- 1) 1997年以前のイランにおける考古学の研究状況は山内和也と大津忠彦によって、詳細に紹介されている (山内・大津 1995; 山内 1996; 山内 1997)
- 2) 鉄器時代のギーラーン地方でも移牧を中心とした景観復元がなされている (Yamauchi 2006)。

引用・参考文献

- Alden, J. R., K. Abdi, A. Azadi, F. Biglari and S. Heydari 2004 Kushk-e Hezar: A Mushki/Jari Period in the Kur River Basin, Fars, Iran. Iran 42: 25-45.
- Alizadeh, A. 2006 *The Origins of State Organizations in Prehistoric Highland Fars, Southern Iran : Excavations at Tall-e Bakun*. Chicago, Oriental Institute of the University of Chicago.
- Atai, M. and R. Boucharlat 2006 Preliminary Report on Excavations in Tang-i Bulaghi, Fars: Joint Iranian/French Team (Settlement Site 85, Graveyard 88, Trenches on canals along the Pulvar River). In Fahimi (ed.), 19-22.
- Azarnoush, M. and B. Hewving 2005 Recent Archaeological Research in Iran: Prehistory to Iron Age. *Archäologische Mitteilungen aus Iran und Turan* 37: 189-246.
- Biglari, F. 2003 Gozares-e barresi-ye mogadamati-ye mohavate-haye oarine sangi-ye mantage-ye Kasan. In S. M. Shahmirzadi (eds), pp. 151-168.
- Biglari, F. and K. Abdi 1999 Paleolithic Artifacts from Cham-e Souran, Islamabad Plain, Central Western Zagros Mountain. *Archäologische Mitteilungen aus Iran und Turan* 31: 1-8.
- Biglari, F., S. Heydari and S. Shidrang 2004 Ganj Par: the First Evidence for Lower Paleolithic Occupation in the Southern Caspian Basin, Iran. *Antiquity* 78.
- Chaverdi, A. A. and P. Callieri 2006 Tag-e Bolaghi, Sires No. 76 and 77: Settlements of the Protohistoric, Achaemenid and Post-Achaemenid Periods. In Fahimi (ed.), 23-26.
- Coon, C. 1951 *Cave Exploration in Iran, 1949*. Philadelphia, the University Museum, University of Pennsylvania.
- Coon, C. 1952 Excavations in Hotu Cave, Iran, 1951, a Preliminary Report. *Proceedings of the American Philosophical Society* 96: 231-249.
- Danti, M. D. 2004 *The Ilkhanid Heartland: Hasanlu Tepe (Iran) Period I, vol. II*. Philadelphia, University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.
- Fahimi, H. 2005 Kura-Araxes Type Pottery from Gilan and the Eastern Extension of the Early Transcaucasian Culture. *Archäologische Mitteilungen aus Iran und Turan* 37: 123-132.
- Fahimi, H. (ed.) 2006 *Abstracts: Symposium on the Archaeological Rescue Excavations in the Bolaghi Valley*. Tehran, Iranian Center for Archaeological Research.
- Fazeli, H. (ed.) 2007 *Symposium on the Latest Results of Archaeological Excavations at Tang-e Bolaghi*. Tarbiat Modares University, 20 January 2007. Tehran, Iranian Center for Archaeological Research.
- Haerincq, E. and B. Overlaet 1996 *The Chalcolithic Period, Parchinah and Hakalan*. Lovanii, Peeters.
- Haerincq, E. and B. Overlaet 1998 *Chamahzi Mumah, an Iron Age III Graveyard; V. 4. The Early Iron Age in the Pusht-i Kuh, Luristan*. Acta Iranica 33. Lovanii, Peeters.
- Haerincq, E. and B. Overlaet 1999 *Djub-i Gauhar and Gul Khanan Murdah, Iron Age III Graveyards in the Aivan Plain*. Acta Iranica 36. Lovanii, Peeters.
- Haerincq, E. and B. Overlaet 2002 *The Iron Age III Graveyard at war Kubud Pusht-i Kuh, Luristan*. Acta Iranica 40. Lovanii, Peeters.
- Haerincq, E. and B. Overlaet 2003 *Bani Surmah : an Early Bronze Age Graveyard in Pusht-i Kuh, Luristan*. Acta Iranica 42-43. Lovanii, Peeters.
- Khalatbari, M.R. 2004a *Archaeological Investigations in Talesh, Gilan 2: Excavations at Toul-e Gilan. Rasht*, General Office of Iranian Cultural Heritage Organization of Gilan.
- Khalatbari, M.R. 2004b *Archaeological Investigations in Talesh, Gilan 1: Excavations at Vaske & Mianroud*. Rasht, General Office of Iranian Cultural Heritage Organization of Gilan.
- Lamberg-Karlovsky, C. C. 2004 *Excavations at Tepe Yahya, Iran, 1967-1975: The Iron Age Settlement*. Cambridge, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.
- Lanfranchi, G.B., M. Roaf and R. Rollinger 2003 Afterword. In Lanfranchi, G.B., M. Roaf and R. Rollinger (eds.) *Continuity of Empire(?): Assyria, Media, Persia*. Padova, La Madernissima. pp.397-406.
- Ohtsu, T., J. Nokandeh, K. Yamauchi and T. Adachi 2005 *Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fourth Season*. Tehran and Tokyo, Iranian Cultural Heritage Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Rothman, M. S. 2005 Transcaucasians: Settlement, Migration, and Trade in the Kura-Araxes Periods. *Archäologische Mitteilungen aus Iran und Turan* 37: 53-62.
- Shahmirzadi, S. M. (eds) 2003 *The Silversmiths of Sialk, Report of the Sialk Reconsideration Project 2*. Tehran, Iranian Center for Archaeological Research.
- Smith, P.E.L. 1986 *Palaolithic Archaeology in Iran*. Philadelphia, the University Museum, University of Pennsylvania.
- Thrane, H. 2001 *Excavations at Tepe Guran in Luristan: the Bronze Age and Iron Age Periods*. Moesgaard, Jutland Archaeological Society.
- Yamauchi, K. 2005 Formation of Historical and Cultural Landscape of the Kaluraz Valley. In Ohtsu, T. et al. (eds.) pp.109-113.

山内和也 1996「イラン考古学の新発見(1)」『古代オリエント博物館研究紀要』17巻、123-149頁。
山内和也 1997「イラン考古学の新発見(2)」『古代オリエント博物館研究紀要』18巻、223-257頁。
山内和也・大津忠彦 1995「イラン考古学の最近の動向」『オリエント』38巻1号、199-211頁。
E. ハーリンク・B. ウヴェラート (大津忠彦・四角隆二訳) 2002

「ルリスターン問題」再考－ Pusht-I Kuh (ルリスターン) におけるベルギー調査団の考古学的成果より－ 大津忠彦・紺谷亮一・足立拓朗 (編) 『古代イラン秘宝展－山岳に華開いた金属器文化－』岡山市立オリエント美術館 76-89頁。

足立 拓朗

中近東文化センター附属博物館

Takuro ADACHI

The Museum of the Middle Eastern Culture Center in Japan